

人生論と宗教

——石丸梧平の人生創造運動

大澤 絢子

はじめに

生き方や人生の意味を論じる人生論には、文学者や哲学者、実業家や宗教者によるものなど多様な種類がある。社会学者の片桐雅隆は、文学者による「人生論の典型」として、武者小路実篤の『人生論』（初刊は一九三八年、角川文庫版は一九五五年）のほか、三木清『人生論ノート』（初刊は一九四一年、新潮文庫版は一九五四年）、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（初刊は一九三七年、新潮社版は一九六九年）といった哲学者や思想家の著作を挙げ、文庫などの幅広い読者が手に取りやすい媒体となることで、これらが戦後社会の代表的な人生論の位置を占めてきたと指摘している^①。

本稿が焦点を当てるのは、戦前期におけるメディアと人生論、そして宗教との関係である。人生論は、必ずしも宗教と関係しているわけではないが、宗教と全く無関係でもなく、既成教団の外側で、さまざまなメディアを通して説かれる人生論において宗教がいかに取り込まれ、発信されてきたのかは、あまり検証されていない^②。そこで本稿では、大正から昭和期にかけて、雑誌を通して大量の人生論を発信した作家・石丸梧平（一八八六―一九六九）の活動の実態と宗教との関係性を考察する。

一 石丸梧平の『人生創造』と『生きて行く道』

1 戦後版「人生雑誌」との共通点

人生論と密接に関わってきたメディアが「人生雑誌」である。代表的な「人生雑誌」とされる『葦』（一九四九年創刊）と『人生手帖』（一九五二年創刊）が最も隆盛し、週刊誌などで「人生雑誌ブーム」として取り上げられるようになったのは、一九五〇年代半ばだった。⁽³⁾メディア史研究者の福岡良明によると、「人生雑誌」は高校などに進学できなかった「ノン・エリート層を主たる読者対象とし、かつ内省と人文社会科学の読書に重きを置き、実利を超えた形而上的な「生き方」の模索と人格陶冶を志向する雑誌」とされる。⁽⁴⁾その主な特徴は、①著名な文学者・知識人が「生き方」や「読書」を論じる、②文学や社会問題への言及がある、③「いかに生きるべきか」を主題とする、④「生き方」や「読書」、「社会批判」を主題とする、⑤読者の寄稿に対する査読体制がある、⑥地理的・時間的制約を超えた読者共同体を形成していることが挙げられる。

①～⑥の特徴は、大正期から石丸が手掛けていた個人雑誌『人生創造』にもあてはまる。この雑誌は戦後も刊行されていたが、隆盛期が戦前であるという点において、戦前版「人生雑誌」に位置づけられよう。だが、『人生創造』の読者は、「ノン・エリートの勤労青年層」が中心だったわけではない。この雑誌の主な読者は、二〇代を中心とする師範学校の生徒・教員、大学の仏教青年会の学生、法政大学や日本大学といった私立大学の学生や会社員が主であり、東大・京大などのいわば（超）学歴エリートと、ノン・エリートの中間に位置する。また『人生創造』では、仏教関連の記事を多く掲載し、読者を対象に仏教講座や参禅会を開催していたほか、親鸞や禅といった仏教的な要素を軸とした人生論が説かれていた。石丸は僧侶でもなく、いずれかの宗派に属する信徒という自覚もない立場で仏教を論じ、人生をいかに生きるべきかという問いへの回答を発信し続けたのである。

2 石丸梧平とは

石丸梧平（号・梅外）は、大阪府豊中市に生まれ、旧制茨木中学を途中退学し、しばらく小学校教師として勤務した後、早稲田大学を経て花

園学院教師、大阪府立今宮中学の教師になった。今宮中学の同僚に折口信夫がおり、彼と親しかった石丸は、折口が上京した後に自身も教師の職を辞し、小説家となるべく大正六（一九一七）年に東京へ向かった。石丸は、それ以前の明治四〇（一九〇七）年に短編小説『淡潮』を島村抱月の序文つきで自費出版し、教師時代には宮武外骨の「不二新聞」や宗教専門誌の「中外日報」の文芸欄を担当するなど、文学との関わりが深かった。一方、仏教その他宗教との関係はほぼ見られず、臨済宗妙心寺派の宗門校である（石丸は禅宗の学林と呼んでいた）花園学院で英語と歴史の教師として勤務していた当時について、僧侶には良い印象を持っていたと述懐してはいるものの、禅について学んだり、参禅したりといった経験は語っていない。⁽⁵⁾

石丸は、新聞の文芸欄を担当していた頃に当時まだ無名だった菊池寛（当時の筆名は草田杜太郎）を見出し、彼と交流していた。⁽⁶⁾ また、石丸が大正時代に主宰していた雑誌『団壘』が発見され、茨木中学の学生だった川端康成の雑誌初掲載作品「生徒の肩に柩を載せて」の掲載が確認されるに至っている。⁽⁷⁾ この発見より、川端をはじめ、与謝野晶子や菊地寛、小川未明、折口信夫、平塚明子（らいてう）、棚橋絢子らの全集未収録作品が同雑誌に掲載されていることも明らかとなり、石丸周辺の作家たちの動向や、文芸界での彼の活動が検証されつつある。⁽⁸⁾

3 小説家を辞めて個人雑誌『人生創造』を創刊

上京後しばらくは小説家として成功しなかった石丸だったが、『人間親鸞』と『受難の親鸞』（共に一九二二年）によってようやく一躍流行作家の仲間入りを果たす。この二作は倉田百三の『出家とその弟子』（一九一七年）の人気を契機に生じた大正期の親鸞流行（「親鸞ブーム」）を代表する作品として、多くの読者を獲得した。⁽⁹⁾ 石丸は、この二作まで親鸞や浄土真宗との関わりはほとんどなかった。ところが、石丸の作品を読んだ青年達は、彼のことを、「何か、偉い宗教家とでも勘違いしたのか、私信を寄せてその苦悩を訴え、解決を望」⁽¹⁰⁾ んだという。石丸は彼らの「私信に返事を書くことに忙殺され」、ついに小説家を辞めて執筆活動の場を『人生創造』へと移行させたのだった。⁽¹¹⁾

『人生創造』は、大正一三（一九二四）年六月から昭和四四（一九六九）年まで四五年間発行され、当初の発行所は大阪屋号書店、大正一三年十一月からは、石丸が立ち上げた人生創造社から発行された。編集兼発行人は石丸本人で、表紙には「人生創造」との大きな四文字とともに「石丸梧平個人雑誌」とある。創刊時は三二ページ、定価一五銭だったが、一年後には四八ページ、定価二〇銭となり、九二―一二〇ページ前

後となる倍大号や特集号も多く、その場合の定価は三〇―三五銭になった（昭和三二年の定価は五〇円¹³）。

創刊号は一万部、約一年後の第一号は一万七〇〇〇部、隆盛時には五万部近くを発行したという。¹⁴ 戦前期の号のうちいくつかは、『出版警察報』の「差押成績表」から発行部数および処分理由とその日付が確認でき、昭和二年一〇月号は、七五〇〇部（風俗壊乱、一九三七年九月一七日付）、昭和三年三月号は、七〇〇〇部（風俗壊乱、一九三八年二月二日付）、昭和四年一二月号は、八六〇〇部（安寧秩序紊乱、一九三九年一二月二八日付）、昭和一五年二月号は、四五〇〇部（安寧秩序紊乱、一九四〇年一月三〇日付）、昭和一六年五月号は、一〇〇〇部（安寧秩序紊乱、一九四一年四月二六日付）である。¹⁵

『人生創造』には、読者から寄せられた人生の悩み、特に恋愛と性欲、宗教に関連する悩みへの回答と、それらをテーマにした論稿が掲載されている。特集号も頻繁に組まれ、たとえば、「恋愛と結婚の問題」（大正一五年六月号）、「青春の時代的推移・恋愛・学問・功名心」（昭和五年四月号）、「宗教生活・恋愛生活——現代の経済組織下に——」（昭和七年四月号）、「禅の修養——創造認識論の実践」（昭和一〇年一二月号）、「物と心の関係・健康問題◇医学と哲学¹⁶」（昭和一二年五月号）、「愛欲と宗教・人生第一の事——戦争と平和・戦争はどうなる——」（昭和一四年七月号）といった号があった。人生や宗教、恋愛のほかに経済や戦争など時事を取り上げることもあり、臨時増刊号として「人生問答号」（昭和六年五月）も刊行されている。

毎号執筆していた石丸に加えて、次のような人物が頻繁に寄稿していた。

江部鴨村^{えべおつそん}（一八八七―一九六九）は、新潟県加茂市にある真宗大谷派の寺院出身で、東京の真宗中学を経て真宗大学を卒業。二六新聞に入社するも七年ほどで退社し、半年間ドイツに留学。帰国後は、『口語全訳妙法蓮華經』（一九一九年）、『全訳華嚴經』（一九三五年）等を出版。大谷大学教授、武蔵野女子学院講師を歴任した。『人生創造』には、「釈迦のあるいた道」（大正一五年一月号―一〇月号）、「釈尊から大乘へ」（昭和二年三月号―一〇月号）のほか、『維摩經講義』（昭和九年八月―一二年五月号）など、仏教思想や經典の解説を多数連載している。

松原寛（一八九二―一九五七）は、長崎県に生まれ、一高から東京帝国大学英文文学科に進み、京都帝国大学哲学科に転入学した。大阪毎日新聞の記者を経てドイツに留学後、日本大学美学科の教授に就任。同大学芸術学科を立ち上げた人物でもある。

大槻憲二（一八九一―一九七七）は、早稲田大学を卒業後、東京精神分析学研究所を立ち上げ、昭和八（一九三三）年に日本初の精神分析学

の雑誌『精神分析』を創刊した。『人生創造』には初期から継続的に寄稿しており、「女心の分析」（昭和九年一月号）、「精神分析 立身出世の道」（昭和十一年二月号・昭和十二年二月号）、「恋愛・性欲の処置」（昭和十二年三月号・昭和十三年八月号）などの論文が連載されている。

榎山半三郎（一八八七―一九四二）は、慶應義塾大学出身で日本橋の海産物問屋を経営する傍ら、日本大学芸術科講師、新宗教教会主宰を務めた。『人生創造』には、「仏教とは何ぞや 仏教概論」（昭和十一年一月号）、「仏教概説」（昭和十一年四月号・一月号）、など仏教に関する論考を頻繁に寄稿している。著書に、境野黄洋による序文がついた『仏教読本』（一九二六年）や『モダン仏教概論』（一九三六年）がある。

彼らの他にも、ルソーの『エミール』やロンブローゾの『犯罪と遺伝』（共に一九一三年）などを翻訳し、戦後は神智学徒として活動した三浦関造（一八八三―一九六〇）、新聞記者で作家の平山蘆江（一八八二―一九五三）、評論家で作家の守田有秋（一八八二―一九五四）、劇作家で明治大学教授の畑耕一（一八八六―一九五七）らの寄稿回数も多い。折口信夫も「古代生活に見えた恋愛」（大正一五年六月号）、「新しい論理の開発」（大正一五年二月号）などを寄稿しており、小川未明の全集未収録の童話「春の海」（昭和十三年六月号）も掲載されている。⁽¹⁶⁾ 執筆者は学者や評論家、記者が中心で、僧侶などの宗教者の寄稿は少なく、多くが一八八五年前後生まれの石丸と同世代だった。

誌面構成は、石丸の人生論や思想解説のほか、宗教関連の記事（経典講義、仏教概説、イエスや釈迦の伝記）、座談会や講演会の速記録、精神分析やヘーゲル哲学の紹介、エッセイや紀行文、識者へのアンケート結果、投稿された短歌や俳句、消息である。先に挙げた寄稿者や識者を招いた座談会も頻繁に行われ、その速記録も掲載されている。テーマは、「異性関係の現実理想」（昭和四年九月号）、「学問・出世・職業・生き方」（昭和六年六月号）、「宗教と経済生活」（昭和七年四月号）、「戦争は続く 如何に自覚すべきか」（昭和八年一月号）、などで、平塚明子、妹尾義郎、友松円諦、中村星湖、安藤正純らが参加している。⁽¹⁸⁾

4 兄弟誌『生きて行く道』の創刊

青年たちの悩みへ回答するために創刊された『人生創造』だったが、次第に専門的で難解な文章が多くなっていった。そこで石丸は、「もっと端的に人生そのものを具体的に語り」、「誰れにでも分かりやすく、然しほんとうの生活を生かして行く」雑誌として、「何よりも若い人たちの相談相手となり光となる」⁽¹⁹⁾ことを目的に、昭和二（一九二七）年三月に『生きて行く道』を刊行する。

『人生創造』の兄弟誌と位置づけられた『生きて行く道』は、昭和一七（一九四二）年四月まで刊行され、翌月から『生活錬成』に名称が変更されている。⁽²⁰⁾ 発行所は『人生創造』と同じ人生創造社で、編集には石丸の妻・喜世子が加わり、定価は二〇銭、ページ数は六四ページで変動はほばない。

執筆者は『人生創造』と重なるが、中心は梧平と喜世子だった。読者から寄せられた悩み相談の手紙を掲載し、それに石丸と喜世子が答える「人生問答」欄があり、投稿された詩や小説が多く掲載されていることも『人生創造』との違いである。誌面は「人生問答」を中心に、時事解説、投稿された小説や短歌、エッセイから構成され、「むつかしくなり過ぎた」⁽²¹⁾『人生創造』に代わり、論文よりも創作や職業、家庭生活に根差した話題が主だった。

二 石丸梧平の人生創造運動

1 人生創造運動の三つの柱

石丸は、『人生創造』を足場に「人生創造運動」に取り組んでいった。石丸によればこの運動は、「社会教化運動であり宗教運動」であり、「人生創造の宗教によりて、先づ人と人とが結ばれて行」くことが目指された。⁽²²⁾ 運動では、「人生は創造あるのみ」との石丸の思想を軸に、出世や性欲、宗教の問題解決が課題とされている。運動が最も活発だったのは、大正一四（一九二五）年から昭和一二（一九三七）年にかけてで、雑誌の定期購読会員（同行）がこの運動を支え、石丸の思想に共感した読者たちとの時間的・地理的制限を超えた共同体が形成されていた。⁽²³⁾

人生創造運動の柱は、①メディア②読者ネットワーク③仏教の三つである。運動にあたり石丸は出版体制を整備し、積極的に雑誌購読会員による支部結成を推奨、会員を集めて仏教講座や夏期合宿、参禅会、定期講演会を開催した。⁽²⁴⁾ 会員同士の交流も盛んで、関東や関西、北陸など地域ごとに連盟が結成され、各連盟の機関紙が刊行されるほど勢いがあった。読者（会員）の年齢は二〇代が中心で、昭和六（一九三一）年の段階で全国のほとんどの師範学校に支部が開設されたほか、⁽²⁵⁾ 大学内の仏教青年会の会員も多かった。会員は当初、男性が主だったが、次第に高等女学校の学生や支部も増え、支援者からのまとまった寄附もないながら、創刊から一〇年後には経済的にも軌道に乗り、『人生創造』の表紙から「石丸梧平個人雑誌」の表記を削除するに至っている。⁽²⁶⁾

2 メディアミックスされた運動

人生創造運動の柱の一つであるメディアについて見ていくと、石丸は千葉にある自宅に人生創造社を設立し、出版・運営組織を整備した。大正一五（一九二六）年からは、社内に編集部、講演部、思想体系部、支部係、演劇部、普通会员係を設置、昭和一〇（一九三五）年頃には、相談部や女性相談所も開設している。⁽²⁷⁾

人生創造社では、『人生創造』と『生きて行く道』のほか、喜世子による『子供の生活記録と修身教育』も刊行している。人生創造運動はこれらの雑誌収益に支えられていたが、「人生観」、「宗教と人生」、「恋愛と人生」などと題する石丸の人生論をまとめた『人生創造思想体系』全八巻（一九二六―二八年）や、旅順工科大学の予科の教科書にもなった『人生の意義』（一九三一年）、『創造人生観選集』全五巻（一九三七―三八年）などの単行本のほか、石丸の文章や講演録をまとめた書籍も多数刊行されている。これらの出版物は、会員が石丸の思想をより深く学び、実践していくためのテキストにもなった。「青春」「結婚生活」「性」といった日常のテーマを掲げて読者からの相談を掲載し、石丸が解決策を提示した小冊子『人生問題叢書』全一三号（一九四五―四六年）も刊行され、運動開始前（一九二三年）を除いた戦前期の彼の著作だけでも五〇冊近くにのぼる。

大量の雑誌と単行本の収益による運動を可能にさせたのは、大正中期からはじまった出版界の急成長である。日本では大正三（一九一四）年に東京雑誌組合と雑誌販売組合が結成された結果、大正八（一九一九）年頃から定価販売が実施され、雑誌は買い切り制から返品自由制・委託制の販売制度に移行し、これが大正期の販売部数の躍進を支える柱となった。⁽²⁸⁾ さらに、元取次業者同士が提携を結んで業界の安定をはかり、出版業界の流通・販売体制が大幅に改良されたことで、全国隅々まで出版生産地（東京、大阪、京都など）からの直送が可能となった。⁽²⁹⁾ 『人生創造』も第三种郵便物として、「雑誌便」といふ特典で運賃が非常に安く、すぐに各地に配本される体制だった。⁽³⁰⁾

人生創造運動ではさらに、声のメディアも活用されていた。座談会のほかに講演会を各地で開催し、石丸をはじめ江部鴨村や榎山半三郎ら運動の主要メンバーが各地で講演する際の講師謝礼も明確に規定されていた。⁽³¹⁾ 大学の講演会としては、「東京各大学仏教青年会連盟主催講演会」（於帝大仏教青年会館、大正一五年一月）のほか、日本大学・法政大学・東洋大学・駒澤大学などが講演会場となった。昭和二年頃からはラジオ講演もスタートさせており、「現代人と宗教」（東京中央放送局）、「人生の意味」（大阪中央放送局）、「親鸞聖人の宗教」（金沢放送局）など、

昭和九（一九三四）年二月までの段階で少なくとも一一講座を放送している。⁽³²⁾日本のラジオ本放送は大正一四年に開始され、昭和三（一九二八）年から全国放送網が完成しているが、石丸はいち早くこの新しいメディアを取り入れたのだ。

そのほか、「創造劇場」との演劇部も設置され、石丸の思想が劇でも表現されていた。演劇部では会員から練習生を募集して俳優を育成し、石丸も出演して定期的に公演会を開催、公演の様子の写真や俳優のプロマイドも販売するなどしており、人生創造運動は出版、講演会、ラジオ、演劇といった多様なメディアがミックスされた運動だった。

3 読者ネットワーク

人生創造運動は、読者ネットワークに支えられた運動でもあった。『人生創造』や『生きて行く道』は書店でも販売されていたが、基盤となったのは定期購読会員である。石丸は彼らを「同行」と呼び、両誌いずれかの購読者五名以上の集まりを「人生創造支部」と定め、支部では「人生座談会」といった会を開いて「会員相互の生活を高め」るよう促した。⁽³⁴⁾支部は世話人が取り仕切り、師範学校や大学、会社の青年会などに設けられた。『人生創造』の刊行の一年後には二八〇の支部が開設され、会員五〇名以上を有する支部は九つになっている。⁽³⁵⁾その後も支部は増え、樺太、台湾、満洲、大連、フィリピン、シンガポール等にも設置された。運動が発足して一〇年後の昭和九年五月には、一二七八支部、昭和一七（一九四二）年二月には一七〇〇支部にもなっている。⁽³⁶⁾一〇名以上の会員を有する支部もあるため、戦前期の段階で会員は一人を超えていたと考えられる。支部の追加状況は毎月の『人生創造』と『生きて行く道』の巻末に「人生創造支部名簿」として掲載され、同じく巻末の「梧平通信」では、支部創設に尽力した会員の紹介や各支部の近況が報告されている。各支部では毎月座談会や勉強会が開催され、近郊へのピクニックも行われた。支部は北海道・関東・東海・岡崎・北陸・関西・長崎、さらには京城など地域ごとに連盟が結成され、支部連盟の機関紙『交響』のほか、連盟ごとの機関紙もあった。⁽³⁷⁾

人生創造運動では、支部の増設、購読会員の勧誘が推奨されており、購読者募集のためにポスターを配布、会員が書店を回ってポスター掲示を依頼し、購読者を募る「人生創造拡大運動」も打ち出された。街で出会っても会員だと分かるよう、「人生創造同志佩用徽章」（会員バッジ）を販売し、「人生創造歌」が制作され、石丸の言葉を刻んだ「人生創造の碑」が会員たちの寄附で建立されるなど、会員同志の連帯感を強め、

運動の一員であることの自覚が高められていった。さらに年一回、会員を集めて比叡山や高野山、御殿場などで仏教講座を開講する二泊三日の夏合宿（『人生創造夏期大学』）も開催（昭和十二年まで）している。昭和七（一九三二）年には、文部政務次官安藤正純を顧問として私立千葉女学校の二棟に創造学園女子専門部を開設し、文学講師に折口信夫、外国文学講師には中村星湖が名を連ねた。³⁸ このほか、寄宿舎の設置、同行による文芸雑誌の刊行、同行同士の結婚を支援する「同行結婚事務局」も設置されるなど、個人で雑誌を読むことを超えて、石丸を中心とした読者たちの共同体が作り上げられていた。

三 人生論と宗教

1 もう一つの通仏教運動——新仏教運動と真理運動との共通点

人生創造運動の三つめの柱が仏教である。『人生創造』と『生きて行く道』の読者は師範学校の生徒・教員、大学生、会社員が中心で、寺院の住職は少ない。³⁹ しかし、宗門校や仏教青年会での講演も多く、東京帝大仏教青年会ほか、駒澤大・立正大・大正大・龍谷大・大谷大など多数の仏教系大学の仏教青年会に支部が設置され、読者には寺院の息子も多かった。さらには、禪についての石丸の文章が妙心寺派から依頼されて宗報（『正法輪』）に転載されたり、支部が地域の仏教青年会とタイアップして講座を開講したりすることもあった。⁴⁰ 仏教思想の解説を掲載する『人生創造』を発行し、仏教講座や参禅会も頻繁に開いていた人生創造運動は、宗派の垣根を超えた通仏教運動でもあったのだ。

メディアと読者ネットワークを柱としたこのような超宗派的仏教運動は、『法句経講義』等のラジオ聖典講座で爆発的な人気を呼んだ友松円諦（一八九五―一九七三）の真理運動と酷似している。昭和九年から開始された真理運動は、在家信徒の教化を目指した仏教運動で、人生創造運動の中心メンバーだった江部は初期真理運動の幹部でもある。⁴¹ 友松をはじめ、真理運動の中核だった高神覚昇も『人生創造』に寄稿し、座談会にも参加しており、二つの運動には接点があった。石丸は真理運動が発足した当時、支部の組織・運営方法を友松に指南したと述べており、⁴² 真理運動も人生創造運動と同じように雑誌（『真理』・『真理の友』・『仏教』）収益によって運営されていた。

真理運動は、友松、高神、江部を中心に、梅原真隆（途中で脱退）、山辺習学、眞野正順、松岡譲、宮本正尊ら「現代日本仏教界の中堅人物の賛助によつて発願された仏教を現代に生かし、この不安と焦燥に悩む現代人の魂に一道の光明を與へ、人々に生活の指導原理を掴ませ、人生

の限り無き価値に目覚めしめんとする宗教運動⁽⁴³⁾」で、地方で支部を結成、全国大会の開催、機関紙の発行、山中結衆が行われていた。⁽⁴⁴⁾支部は五名以上で、支部の集まりを連合と呼び、定例講和会や仏典研究会、座談会が行われていた。出版、講演会、ラジオ、座談会といったメディアミックスを体現した真理運動の体制は、人生創造運動とほぼ一致している。人生創造運動では大規模な全国大会は行われていなかったものの、定期的に講演会が開かれ、合宿には全国各地から会員が参加した。經典の講義や仏教思想の解説を掲載していた『真理』のように、『人生創造』でも、江部の「維摩經講義」や「新仏教概論」、梶山半三郎の「仏教概論」など仏教関連の文章が多く掲載されており、人生創造と真理運動に矛盾はないと考え、どちらの支部を作るべきか迷う読者もいたほど、⁽⁴⁷⁾両者は共通点が多い。

相違点として、真理運動の中心メンバーが僧籍を持つ友松のほか、梅原や山辺ら学僧であったのに対し、人生創造運動は石丸をはじめ僧侶ではないメンバーがほとんどだったことが挙げられる。『人生創造』に經典講座を多数連載し、夏合宿や講演会で仏教講座を担当していた江部は寺院出身だが、得度はしておらず僧侶ではない。江部と同様に仏教講座を担当していた梶山は日大の宗教科講師、新宗教会主宰を務めていたが、彼も僧侶ではなく本業は地主・企業経営者だった。そのためもあってか、人生創造運動では自由な教義理解が行われ、真理運動のように信仰上の問題からの分裂も生じなかった。⁽⁴⁸⁾とは言え、既成教団外における超宗派的仏教運動という点において、人生創造運動は真理運動と通底している。

そこで関係してくるのが、高島米峰や境野黄洋らを中心とする新仏教運動である。新仏教運動は、明治三二（一八九九）年に結成された仏教清徒同志会（のちに新仏教徒同志会へと名称変更）による超宗派的の仏教運動で、友松の真理運動はこれを引き継いでいた。⁽⁴⁹⁾新仏教運動では、明治三三（一九〇〇）年から大正四（一九一五）年にかけて『新仏教』が毎月刊行され、仏教関係の学術的な記事（仏教史、教理、美術、宗教学）、仏教界の時評や人物評、新仏教の思想に関する記事のほか、社会主義やニーチェなどの思想紹介記事、識者からの寄稿文やエッセイ、和歌や短歌や俳句、文芸や書評、新体詩や漢詩、演説会などの催事報告、会員の近況を掲載していた。⁽⁵⁰⁾なかでも「斬新な」編集とされるのがインタビュー記事で、⁽⁵¹⁾往復はがきに「來世の有無」、「釈尊について」などの質問を記して識者へ送り、返ってきた文をそのまま掲載している。

『人生創造』はこれと同じ形式を採り、「ハガキ一枚に描く人生観」、「性道德の新建設」などの質問を投げかけ、返ってきた文章を掲載している。回答者（送付先）は、安藤正純、小川未明、野口雨情、相馬御風、岡本かの子、森田正馬など政治や文学、学界の著名人である。『人生創造』の誌面構成も『新仏教』と重なる点が多い。石丸が『新仏教』を意図的に踏襲したかは不明だが、仏教講座や仏教思想を中心に、時評や文

芸、演説会の記録等を掲載した雑誌メディアによる超宗派の仏教運動という点からすれば、人生創造運動は、新仏教運動と真理運動に連なるもう一つの通仏教運動だと言えるだろう。

2 親鸞の生き方を理想とする人生論

人生創造運動を通して石丸が説いた人生論とは、親鸞の生き方を理想にして、「欲望の連続」である「人間生活」をいかに生きるかを説くというものだった。⁽⁵²⁾ 彼は、親鸞のように生きる意味を自ら発見していく生き方こそ「創造ある人生」（「人生創造」）だと主張して運動のスローガンに掲げ、雑誌や単行本、講演会、演劇、ラジオなどいたるところで繰り返し発信していった。

石丸は、自分たちは「浄土真宗」という既成宗教によつてはあまりにも救はれ難い⁽⁵³⁾と述べ、比叡山を下りて煩惱を抱えながら生きた親鸞の生活体験を重視する。たとえば、「親鸞の宗教」と題する東洋大学真宗会での講演では、「何よりも私は、親鸞が修道生活を廃棄して叡山を下りる、あの深い体験、即ち鋭い人間生活の反省に対して、ほんとうに魂の底から揺り動かされる気がするのであります」⁽⁵⁴⁾と述べ、『人生創造』の誌面でも、「親鸞上人の生き方、親鸞と云ふ人間の歩んで行つた道」にこそ興味があり、「一人の人間が真実に生きて行つた道を眺める時、そこには動かされないでは居られぬものがある」⁽⁵⁵⁾と記している。

読者から寄せられた悩みへの回答でも、戒律を守って修行する出家の道ではなく、人間が生活していく上で避けて通れることのできない苦悩と向き合い続け、生きる意味を体験的に見出した親鸞のように生きるよう促している。⁽⁵⁶⁾ 社会的に恵まれた職業に就きながら他人との関係に悩む青年に対しては、俗人の世界で煩惱を抱えながら生きた親鸞のように自己の欲望や浅ましさをしっかりと見詰め、他人を理解し許すようにと説く⁽⁵⁷⁾。石丸は、苦悩を抱えながらも自らを深く見詰め、人生の意味を発見していった親鸞のような生き方を「創造」と呼び、自ら生きる意味を見出し、工夫して生きる道を繰り返し論じていったのだった。⁽⁵⁸⁾

恋愛や結婚に関する悩みに対しても、石丸は自身が考える親鸞の生き方を、現実の生活に当てはめて回答している。たとえば、恋愛については、「恋愛なきを悲しむことよりも、夫婦生活を呪ふことよりも、恋愛生活を創造し、夫婦生活に感謝することの出来る人こそ救はれるのである」⁽⁵⁹⁾と回答し、持病のために結婚できない自分のせいで兄が結婚できないと悩む二三歳の女性読者には、どんなに難しい問題でも人生に行き詰

まりはないと論じ、自分が兄夫婦の存在を認めていけるよう一人の女性として精神を向上させよと論じている。⁽⁶⁰⁾

3 区別されない親鸞と禅

仏教のなかで石丸がもう一つこだわったのが禅である。彼は、人間が生きる上で必ず生み出されてくる欲望をどう扱うかに対する道徳が禅宗には不足しており、禅で言われる「平常心」も、「生身のからだを持った生きた人間が現実生活に對してしつかりと腹をきめること、人間生活の根本覚悟を決めること」でなければならぬと述べる。⁽⁶¹⁾これは駒澤大学で開催された講演会での発言だが、ここでも彼は、人間の現実的な生活上の悩みに答えるため、仏教を独自の視点から論じていく。

石丸は、禅が体験的な宗教であることを評価し、坐禅を重視していた。彼が禅に強く関心を寄せていったのは昭和一〇年以降で、『人生創造』に禅関連の文章を立て続けに掲載し（「智慧と禅定・解脱への道」昭和一二年二月号、「坐禅と公案」六月号、「生命発展の弁証法 人生創造公案の解き方」一〇月号、「禅と人生創造の哲学」一一月号など）、「禅の修養」といった特集号も生まれ（昭和一〇年一二月号）、臨済宗円覚寺派の宗務総長東海裕山を呼んだ参禅会のほか、定期的に曹洞宗寺院での参禅会も開催していた。⁽⁶²⁾参禅会での講演録『禅のある人生』（一九三七年）のなかで彼は、坐禅とは何か、禅定とは何かをよく理解して、「その心掛けを日常生活の上に生かして行くことにしたい」と論じ、坐禅はやり続けることが良いのではなく、坐禅する心持ちで心を落ち着かせ、日常生活や仕事を真面目に一生懸命やることが重要だと説いている。⁽⁶³⁾

石丸の主張する人生創造と禅との違いとは、「生活に生かす道」であるか否かだった。⁽⁶⁴⁾石丸は、坐禅を通して公案を解き、「ほんとうの実践に於ける心構えを練らねばならぬ」と述べ、「人生創造の公案」は、「人生に結論なし、ただ創造の一途あるのみ」だと論じる。⁽⁶⁵⁾さらに、禅と人生創造は、宇宙・人生の真理の認識を目的とするという点では同じだが、禅が仏法を知るために坐禅をして公案を解くのに対し、人生創造では実生活の苦悩に直面して工夫し、「どう生きるか」を解くのだと強調する。⁽⁶⁶⁾石丸にしてみれば、禅の公案は抽象的で生活を素通りしており、真の仏教とは、「端的に「人生」といふものを対象として、自由に悟の道を求めて行く」ことだとされた。⁽⁶⁷⁾「生活そのものの中にこそ真理（涅槃）がある」⁽⁶⁸⁾と述べる彼にとって、仏教は現実の生活の補助となり得るかどうかが重要であって、ここでは親鸞か禅かという明確な区別はなされていなかった。

4 「人生をいかに生きるべきか」を悩み、読む体験の共有

このような石丸の人生論に対し、読者からの反響としては次のようなものがある。

熱読に熱読を重ねて石丸先生の御指導に全く感激を覚えました。人間として生きて行く道に、先生の御高邁なる思想を月々の雑誌からお分ちして戴いて、生き甲斐を感じつゝ、生命を育んで居ります。苦しみと云ふ事は勿論断ち切れるものではないと思ひますが、両雑誌から得る教訓を様々に観察して見まして、打続く苦しみにも堪え得られる修養が出来て来たと云ふ事は、心からなる私の感謝で有ります。喜びで有ります。

(東京・男性Y氏)⁽⁶⁹⁾

あんなにも朗らかに、自由に、生き生きと、生きられた生活は、私の生涯を通して本当に空前の事でございます。(中略)御講演に、談話に、演劇に、朗読に、連日に亘つての、先生(注…石丸のこと)の御熱心な御指導に、私達はどんなに大きなものを得させて頂きましたか判りません。生きて居る事よろこびを、しみじみ感じられました。

(「夏期大学から帰って」東京・女性I氏)⁽⁷⁰⁾

これらの言葉からは、『人生創造』や『生きて行く道』を読み、石丸の講演を聴き、彼の思想に触れることが読者として格別の体験であったことがうかがえる。両誌を愛読しているという読者も、「石丸先生を初め緒先生の御教をかたじけなうして「明日への生活」に希望を抱き、与へられた職を何よりの楽しみに励んで居るものです」⁽⁷¹⁾との私信を寄せ、別の読者は、「石丸先生、生か死かの一線を往来する時先生に救はれた私です。真剣です。血がにじむ程の私の生活の告白です」と述べて貧しさを訴え、「人生創造」を唯一の友として生活してゐます。(中略)実は申し上げるのも恐れ入りますが先生の貴著「受難の親鸞」を一部御恵送下さいませんか?」⁽⁷²⁾と懇願している。

読者からの感想は、石丸の親鸞論や禅に関する文章その他の仏教に関するものはほとんどなく、石丸の思想によって人生が変わった、救われ

た、もっと石丸の言葉に触れたい、石丸と時間を共にしたいといったものが圧倒的に多かった。「私どもの知らうと欲して知る機会がなかった禅道や悟りについて知らせて頂いたことは何よりの喜びであります」と述べる読者も、「善き参謀となつてくれたのは御恵送頂く人生創造でした」と記して、病気で思い悩むなかで『人生創造』を読むことがどれほど救いであつたかを長々と綴っている。読者たちは、親鸞や禅といった仏教に関する知識を学び、信仰を獲得することよりも、石丸の人生論を読み、それを生き方の指針とすることに意味を見いだしていたのだ。

彼らにとっては、同世代の読者の悩みを読むと同時に、悩みの体験を青年期の一定期間継続して共有することも救いだったのだろう。彼らは悩みが解決したからといって直ちに雑誌購読を止めることもなく、雑誌を読み、単行本を購入し、座談会や勉強会、講演会に参加し続けることで、石丸の言説に触れ、他の読者とも繋がっていた。石丸もそのような姿勢を否定せず、『人生創造』や『生きて行く道』を読むことも坐禅と同じ心構えだと説き、⁽⁷⁴⁾親鸞や禅について何度も言及しつつ彼らの悩みに答えていった。

5 石丸梧平と宗教との関係性

石丸は人生創造運動を「社会教化運動であり宗教運動」⁽⁷⁵⁾だと自覚しつつ、既成教団から自由な立場で親鸞や禅の思想を繰り返し発信することで、人びとが寺院の外側で仏教に触れる機会をもたらしした。「仏教の近代化とは、仏教が（日本の）寺院から出て行く過程だ」と吉永進一が指摘するように、⁽⁷⁶⁾石丸の人生創造運動も、日本仏教の近代的な受容と発信のかたちだと言える。だが、石丸の雑誌の読者たちの姿勢は、単に仏教を受容するというだけのものではなかった。読者の関心の多くは、「石丸の雑誌を読む」、「石丸の思想に即して人生に悩む」ことに向けられ、彼の言説や活動によって仏教の信仰を得ていたわけではないからだ。人生論というかたちをとった石丸の親鸞論も、結果的には一般社会での親鸞の認知度を高め、親鸞に関する知識を普及させることにはなっただろうが、彼の親鸞理解は独自のものであり、それによって読者に親鸞や仏教を信仰するよう勧めていたわけではない。

読者たちが宗教者であるかのように信奉していたのは、石丸だった。運動開始から七年後には、読者が石丸の名言を選んだ「人生創造愛誦語録」がまとめられ、読者たちの寄付によって「人生に結論なし、ただ創造の一途あるのみ」と彫られた記念碑が曹洞宗の寺院に建立され（昭和一二一年）、彼の言葉を掲載した手帳『同行目録』（昭和一二―一三年）も販売された。人生創造運動では、石丸を尊敬し、大量かつレトリックや

反復の多い彼の人生論を浴びるように読み、聴き、彼の説く思想を實踐し、地理的・時間的制約を超えて悩みの体験を他の読者と共有することで、宗教的な共同体が形成されていたのである。

人生創造運動と宗教との関係性を考えた場合、それは既成教団あるいは新仏教運動、真理運動による仏教普及のあり方とは一線を画した「宗教的なもの」だったと位置付けられる。ここで言う「宗教的なもの」とは、「宗教」とは区別されるが、「宗教」を源泉としたり、何らかの宗教性や靈性を帯びたものであり、「靈術」や「民間精神療法」、あるいは「宗教的共同体」をさす。⁽⁷⁷⁾石丸が親鸞を題材に小説を書いて流行作家となり、人生創造運動を開始した大正期の日本宗教は、Religionの訳語として明治に生まれた各宗教伝統やそれらを包括する「宗教」と、⁽⁷⁸⁾「宗教的なもの」、そして民俗信仰や類似宗教（新宗教、民衆宗教）といった「非宗教」の複合体から形成されていた。⁽⁷⁹⁾とりわけ、修養思想や民間精神療法などの「宗教的なもの」は、大正期に入ってから広く人々に支持され、受容されていたことが明らかにされつつある。⁽⁸⁰⁾既成教団の外側で、さまざまなメディアを通して人生論を発信し、読者たちとの宗教的共同体を作り上げた石丸は、そうした「宗教的なもの」を體現していた。

僧侶ではない石丸によって、いわば勝手に語り出された仏教的言説が、寺院の側にも受容されたことも注目できる。石丸の思想は、史実や伝統的な教義理解、あるいは信仰に基づいたものでもない。それにも関わらず、仏教青年会や仏教系の宗門校が石丸を講演に呼び、教団は彼の文章を機関紙に掲載し、彼を中心に寺院での参禅会も行われていた。先述した吉永の指摘のように、近代の親鸞についても、近代的な史実検証の積み重ねや『出家とその弟子』などの文学作品を通して宗祖である親鸞（像）が一般社会に普及し、大衆化してきた過程がこれまで論じられてきた。⁽⁸¹⁾しかし、そうした寺院の内側から外側へのベクトルだけでなく、石丸のような寺院の外側の存在が、寺院の側から招き入れられるようになっていったことも、日本仏教の近代化を示す事象の一つなのではないだろうか。

おわりに

石丸の人生創造運動は、寺院の外側だけでなく内側にも波及したという二面性がある。石丸の思想や活動が寺院の側でも受容されていた例は、僧侶ではない人物を寺院が仏教講座の講師として登用したり、著名人が語る教祖像を教団が受け入れたりする現代の日本仏教のあり方にも繋がる⁽⁸²⁾と考える。

人生創造運動の支部は、昭和一六（一九四一）年二月から「人生創造修養会」に、『人生創造』は『日本的教養』へ名称を変更、石丸は急速に日本主義に傾いていく。石丸は戦後も「創造ある人生」を掲げ、寺院だけでなく政治家とも近い関係を築いていくが、戦中期以降の彼の思想と活動の意義は、今後の課題としたい。

註

- (1) 片桐雅隆『自己と「語り」の社会学——構築主義的展開』世界思想社、二〇〇〇年、一四一―一四二頁。
- (2) 関連する研究に牧野智和『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探究』（勁草書房、二〇一二年）があるが、自己啓発と宗教との関係は問われていない。自己啓発を含むセラピー文化と宗教との関係を論じたものに、小池靖『セラピー文化の社会学——ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』（勁草書房、二〇〇七年）はあるが、多様な自己啓発のあり方に比して研究の量は不足している。
- (3) 『葦』一九四九―一九六〇年。創刊号は三〇〇〇部、一九五五年は七万部。『人生手帖』一九五二―一九七四年。創刊号は一〇〇〇部、一九五五年は八万部（福岡良明『働く青年』と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房、二〇一七年、九九―一〇二頁）。
- (4) 福岡、前掲、三三一頁。
- (5) 石丸梧平「禅の修養―長昌寺参禅会にて―」『人生創造』昭和一〇年二月号、三頁（以下、『人生創造』と『生きて行く道』の発行年は和暦にて記載）。
- (6) 片山宏行『菊池寛の航跡（初期文学精神の展開）』和泉書院、一九九七年。
- (7) 宮崎尚子「新資料紹介 川端康成「生徒の肩に柩を載せて 葬式の日 通夜の印象」（石丸梧平主宰『団欒』掲載）」『国語国文学研究』四七号、二〇一二年。
- (8) 宮崎「石丸梧平主宰の家庭雑誌「団欒」に関する調査①―⑥―」『尚絅学園研究所紀要 A 人文・社会科学編』六号、四五―四九号、二〇一二年―二〇一七年。
- (9) 大正一一年前後に生じた親鸞を題材とする文学作品や論説の流行。流行期の作品の傾向と特徴は、大澤絢子「大正期親鸞流行と親鸞像」『仏教文化学会紀要』二七号、二〇一九年。
- (10) 石丸梧平「早稲田文学「道」Ⅶ」（石丸元康『石丸梧平の『人生創造』に学ぶ』彩図社、二〇〇四年、三―四頁）。
- (11) 石丸梧平、同前、四頁。青年たちが石丸に私信を寄せた理由として、この二作が出世や性欲といった青年の抱える悩みが主題となっていた点が挙げられる（大澤『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房、二〇一九年）。
- (12) 石丸元康、前掲、一八三頁。一九四二―四六年、一九四八―五六年、一九五七―一九六八年分の所在は確認できていない。なお、臨時増刊号が発行された月もある。
- (13) 昭和二年以降は六四ページ二〇銭の号が多数を占める。
- (14) 『人生創造』昭和九年五月号、六二頁。

- (15) 小林昌樹編『雑誌新聞発行部数事典』金沢文圃閣、二〇一一年、一三二―一三三頁。対象は石丸の文章ではなく、寄稿者や座談会の登壇者による性欲論や五・一五事件など時勢への意見だった。
- (16) 小埜裕二編『人物書誌大系43小川未明全童話』日外アソシエーツ、二〇一二年および小埜編『小川未明新収童話集3 昭和3―10年』日外アソシエーツ、二〇一四年にて未収録であることを確認。
- (17) 宇野円空の講演録『宗教学的考察』（『人生創造』昭和一〇年一月―二月号）はあるが、僧侶の寄稿は少ない。
- (18) 座談会は一〇人ほどで行われ、銀座のグリルや喫茶店、経済倶楽部などが会場だった。
- (19) 石丸梧平『生きて行く道』創刊の言葉「生きて行く道」昭和二年三月号、二頁。
- (20) 『人生創造』昭和一七年五月号、四七頁。『生活錬成』は国立国会図書館に納本されておらず、ZIN学術情報ナビゲータで検索した結果、大学附属図書等にも蔵書がなく現存が確認できていない。なお、筆者が古書店より入手した『生きて行く道』は、昭和二年三月（創刊号）から昭和一五年四月までの号のうち計六〇冊である。
- (21) 『人生創造』昭和一二年七月号、六三頁。
- (22) 『人生創造』大正一六年一月号、九四頁。
- (23) 全国の師範学校の支部は、昭和一三年七月にほぼすべて解体されたが（『人生創造』昭和一三年七月号、七七頁）、その後新設された支部の番号は、引き続き連番になっている。
- (24) 実現はしていないが、『人生創造』創刊当時は人生創造会館の建設や「創造の村」の立ち上げ、人生創造の財団法人化も目指していた。
- (25) 『人生創造』昭和六年六月号、六三頁。未設の学校は一〇数校の

- みとされている。
- (26) 『人生創造』昭和九年四月号、七四頁および一三三頁。
- (27) 相談部では一九三八年に「根本的精神修養・解脱」を目指す神経質解脱寮を開設。
- (28) 一九一八年に「東京雑誌協会」と改称、一九二四年に「日本雑誌協会」となる。
- (29) 山本芳明『文学者はつくられる』ひつじ書房、二〇〇〇年、二三〇頁。
- (30) 『人生創造』昭和一二年一月号、一二五頁。
- (31) 青年団、処女会は三〇円、教育会他学術講演は五〇円（『人生創造』昭和二年二月号、五七頁）。
- (32) 『人生創造』昭和九年二月号特集号。「石丸梧平ラヂオ放送講演集」として一一本の原稿を収録（安食文雄『20世紀の仏教メディア発掘』鳥影社、二〇〇二年、一三四頁）。
- (33) 日本放送協会放送史編修室編『日本放送史』上巻、日本放送出版協会、一九六五年。
- (34) この規定は「支部規則抄」として毎号掲載。『人生創造』と『生きて行く道』の購読者のうち、二年分の代金前納者を特別会員制度と定めて石丸直筆の言葉を記した短冊を贈呈、倍大号も通常価格とするなど優遇していた。
- (35) 『人生創造』大正一四年六月号、八七頁。
- (36) 集計は増加分のみが記載。
- (37) 東海連盟『人間』、岡崎連盟『創造』、関西連盟『創造』一途、北陸連盟『いきる』など。京城の連盟設置は昭和一二年（『人生創造』昭和一二年九月号、一二七頁）。
- (38) 『人生創造』昭和七年四月号、裏表紙。

- (39) 寺院の住職が初めて支部を設置したのは、『人生創造』の創刊から一三年目(『人生創造』昭和一一年一二月号、一二七頁)。なお、『生きて行く道』の「人生問答」欄に投稿している読者は大学に進学していない二〇代の男女も多い。
- (40) 「禪の修養」(昭和一〇年一二月号掲載)が転載(『人生創造』昭和一一年一二月号、一二二頁)石丸は「正法論」と記しているが、正しくは「正法輪」と考えられる。大阪連盟では一乗仏教青年会とのタイアップで聖典講座を開講(昭和一〇年一二月号、六一―六二頁)、長崎連盟の事務所は長崎中央仏教協会だった。
- (41) 友松円諦『世間虚仮』誠信書房、一九五九年、一八二―一八三頁。
- (42) 「人生創造」昭和一〇年一〇月号、六二頁。石丸は友松の『阿含経講義』へ依頼されて推薦の言葉も寄せている。
- (43) 伝道部編『全日本真理運動とは何か——その実践と態形』全日本真理運動本部、一九三九年、一頁。
- (44) 坂本慎一『戦前のラジオ放送と松下幸之助——宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』PHP研究所、二〇一一年、二一二頁。
- (45) 『真理』昭和一三年四月号、一四六―七頁。
- (46) 坂本『ラジオの戦争責任』PHP新書、二〇〇八年、一一三頁。
- (47) 「人生創造」昭和一〇年一〇月号、六三頁。
- (48) 浄土思想に関する見解の相違で梅原は会の発足後三ヶ月ほどで脱退。
- (49) 坂本、前掲『戦前のラジオ放送と松下幸之助』、一九八頁。
- (50) 吉永進一「『新仏教とはなにか?——「自由討究」と「健全なる信仰」」吉永進一ほか『近代日本における知識人宗教運動の言説空間——『新佛教』の思想史・文学史的研究』二〇一一年、三五頁。
- (51) 吉永、同前、三六頁。
- (52) 石丸梧平『芸術と生活創造』小西書店、一九三三年、二頁。
- (53) 石丸梧平『禪のある人生』春陽堂、一九三七年、一二頁。
- (54) 「人生創造」大正一四年九月号、四頁。
- (55) 「宗教についての考察」『人生創造』大正一五年七月号、三頁。
- (56) 石丸梧平、前掲『禪のある人生』、一二頁。
- (57) 「人生創造」大正一四年七月号、三〇―三二頁。
- (58) 石丸梧平、前掲『禪のある人生』一七五頁。
- (59) 「人生創造」大正一五年七月号、二七頁。
- (60) 「生きて行く道」昭和一一年一二月号二三―一八頁。
- (61) 石丸梧平「平常心と大道無門——駒沢大学における講演——(つづき)「禪と人生創造の哲学」」『人生創造』昭和二年八月、五頁。
- (62) 通常の参禅会は、曹洞宗僧侶の高橋天國の寺院(東京・小金井)にて開催されていた。昭和一〇年頃より禅会が大衆化していくことに関しては、武井謙悟「近代日本における禅会の普及に関する考察——『禪道』・『大乘禅』の記事を中心として」(『近代仏教』二六号、二〇一九年)。
- (63) 石丸梧平、前掲『禪のある人生』、六二頁。
- (64) 石丸梧平、同前、一九六頁。
- (65) 石丸梧平、同前、一四一、一九二頁。
- (66) 石丸梧平、同前、一九六頁。
- (67) 石丸梧平、同前、一九七、一六一頁。
- (68) 石丸梧平、同前、一七五頁。
- (69) 「人生創造」昭和七年八月号、四六頁。住所と氏名が記載されているがイニシャルで表記。

(70) 『人生創造』昭和五年一〇月号、六七頁。氏名が記載されているがイニシャルで表記。

(71) 『人生創造』昭和八年五月号、四三頁。

(72) 『生きて行く道』昭和五年六月号。

(73) 『人生創造』昭和一年四月号、八九頁。

(74) 経費の削減のため『人生創造』と『生きて行く道』は、小口を切り落とさないで製本したアンカットが常だったが、読者が自ら雑誌の耳を切り、読むのは坐禅と同じ心構えだとも述べている(『人生創造』昭和二年一月号、二二―二四頁)。

(75) 『人生創造』大正二六年一月号、九四頁。

(76) 吉永進「はじめに」大谷栄一ほか編『近代仏教スタディーズ——仏教からみたもうひとつの近代』法藏館、二〇一六年、viii頁。

(77) 大谷栄一「総論——大正宗教史の射程」島蘭進ほか編『近代日本宗教史第3巻 教養と生命——大正期』春秋社、二〇二〇年、六頁。

(78) 鈴木範久『明治宗教思潮の研究——宗教学事始』東京大学出版会、一九七九年、一三―一七頁。磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』岩波書店、二〇〇三年、三一―三八頁。

(79) 大谷、前掲、六頁。

(80) 大谷、前掲、一七―二二頁。明治末期に刊行された加藤咄堂の

『瞑想論』(一九〇五年)や『修養論』(一九〇九年)以来、個別の宗教的文脈に依存しない「心身修養」が流行して大正期に呼吸や静坐法といった民間精神療法が最盛期を迎え(栗田英彦『明治三〇年代における「修養」概念と将来の宗教の構想』『宗教研究』八九巻三号、二〇一五年および吉永進「序論」栗田ほか編『近現代日本の民間精神療法——不可視なエネルギーの諸相』国書刊行会、二〇一九年)、大本教や大霊道などの宗教団体や霊術団体が急成長している(井村宏次『霊術家の饗宴』心交社、一九八四年)。

(81) 福島和人『近代日本の親鸞——その思想史』法藏館、一九七三年。

(82) たとえば大谷派では、政治学者の中島岳志を教学会議の教学員に迎え、主催する講演会に山折哲雄ら知識人を招き、漫画家の井上雄彦に親鸞の肖像の制作を依頼するなどしている(大澤、前掲『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』)。

(83) 中曽根康弘とは特に親しく、死後に『人生創造』を任せようとするほど信頼していた(石丸美春「死と石丸梧平」『大法輪』第三六巻八号、一九六九年)。一九六二年には、宇治萬福寺境内に人生創造の碑が、七八年には豊中市に石丸の顕彰碑も建立された。